

# 野生ニホンザルの社会的知性

中川 尚史(京都大学大学院理学研究科)

霊長類の知性の進化を推し進めた要因を説明する仮説として、社会的知性仮説があります。この仮説は、複雑な社会的相互交渉を行う上で知的能力に勝る個体が有利となり、その能力に遺伝的基盤があることによってそうした個体が自然選択されてきたとする仮説です。しかし、野生霊長類を対象にその社会的知性を実証するのは困難であるため、ほとんど研究がないのが現状です。本発表では、まず私の研究室の大学院生がニホンザルを対象に行った社会的知性の実証研究を2例紹介します。他方、ヒトの社会的知性をイヌがもつのは、それ以前にヒトに対する寛容性を進化させたためであるとする情動反応性仮説があります。この仮説は同種他個体への寛容性にも応用されていますが、残りの発表では、他個体に寛容な種内変異をもつニホンザル淡路島個体群において認められた協力行動についての大阪大学人間科学研究科の大学院生の研究を紹介します。



図の説明

淡路島のニホンザルの群れが描く“サル文字”。餌で「サル」という文字を描いておけば、それに合わせてサルが並ぶことで“サル文字”を描くことができます。寛容性が高いため個体間距離が短くても喧嘩が起きず、きれいに描けます。



京都大学大学院理学研究科生物科学専攻(人類進化論教室)教授。理学博士。1980年京都大学農学部卒業。1989年京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。日本学術振興会特別研究員、シオン短期大学助教授、神戸市看護大学助教授、京都大学大学院理学研究科助教授、准教授を経て、2015年より現職。専門は霊長類学。現在はニホンザルの種内変異に関心をもつ。著書に『サルの食卓』(平凡社、1994年)、『食べる速さの生態学』(京都大学学術出版会、1999年)、『サバンナを駆けるサル』(京都大学学術出版会、2007年)、『The Japanese Macaques』(共編著、Springer、2010年)、『“ふつう”のサルが語るヒトの起源と進化』(ぶねうま舎、2015年)などがある。